MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．１０．１１　発行元
第 405 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

西村京太郎『SLやまぐち号殺人事件』

８月に文藝春秋からノベルス版で西村京太郎の『ＳＬやまぐち号殺人事件』が発行された。３月に亡くなった西村の最後の長編作品ということになるのだろうか。作者の業績を踏まえて取り上げてみることにした。

『西村京太郎の推理世界』

文藝春秋から西村京太郎の業績をまとめた本が出た。『西村京太郎の推理世界』と題されたムック本。『オール讀物』編集部が取りまとめたもの。

この作品『SLやまぐち号殺人事件』は…

西村京太郎の訃報を聞いた後の特集を組んだのが第３４３号。その時、「雑誌に連載中の作品があるのでは…」と書いたが、この『ＳＬやまぐち号殺人事件』はそれに当たる。『オール讀物』に令和３年に連載され始め、最後の部分だけが未掲載だったようだ。幸い結末までの原稿が出来上がっていたので、この本になったのだろう。

帯にも「絶筆」と記されている。西村作品を読む機会がこの作品を最後にもう来ないかと思うと残念でならない。ゆっくり味わいながら読もうという気持ちになる。

トラベルミステリとしての出だし

西村京太郎と言えば「トラベルミステリ」。本作の出だしはそれに相応しい展開。ＪＲ山口線を走るＳＬやまぐち号。新やまぐちと津和野を蒸気機関車が５両編成の客車を引いて走る。全車指定席。

２０２０年９月２８日。新やまぐち駅発のＳＬやまぐち号から最後尾の５号車が行方不明になってしまった。展望デッキつきの車両には３２名の乗客が乗っていたという。山口駅と仁保駅の間で何が起きたのか。付近には写真を撮ろうと狙っている鉄オタたちもたくさんいるというのに…。

初期の頃の西村作品なら、列車と乗客がどのようにして消え失せたのかという部分に謎の力点が置かれるのだろうが、本書は最近の西村作品の傾向そのままに明治維新関連の流れに話は転換していってしまう。十津川警部の「アリバイ崩し」にならないのが残念。

高杉晋作と奇兵隊の話

西村ミステリ、最後期は第二次世界大戦、特攻の話や明治維新絡みのテーマが多い。本作は山口県が舞台なので、長州藩そして高杉晋作の話に進む。高杉晋作が長州戦争の時に組織したのが「奇兵隊」。農民や商人などからの希望者で成り立っていた。長州藩の武士が弱腰になりかけたところを跳ね返す大きな役目を果たした一団である。

維新後、隊員はその働きに応じた恩賞を受けることができずに苦しい生活に追い込まれた者も多かったようだ。本書前半に登場するやまぐち号の５両目に乗っていたのは奇兵隊に繋がっていた人達らしい。

ということで、十津川警部の後半の役目は幕末から明治にかけての当時の人達の事情を聴取することに移っていく。

最後の部分は今一つ整理不足。作者が言いたいことが明確に伝わっていない気がする。没後に、残された原稿をまとめたものなので、不十分な箇所があるのは仕方がないかなとも思う。

西村京太郎が伝えたかったもの

１９３０年生まれで、戦前、戦中、戦後を生きてきた西村京太郎が伝えたかったこと。本格ミステリを意識していた初期の時期、トラベルミステリの中期の時期と各種の段階があるが、晩年は生きてきた時代を振り返り、歴史に再評価を加えていくことの大切さを訴え続けていたように感じられる。幕末から明治にかけての激動の流れも、いろいろな角度から見直してみることが必要なのではないだろうか。

草野唯雄『山口線"貴婦人号"』

１９８１年カッパノベルス書下ろし。トラベルミステリ全盛期の代表的な作品。西村京太郎の最後の作品が『ＳＬやまぐち号』だったので、同じ山口線を舞台にした本書を載せてみることにした。草野唯雄の代表作とも言える作品。

話は多田建設会社の社長を引退しようとしている多田源吉とその娘の道子が故郷の津和野・山口を旅する場面からスタートしている。道子は子どもの頃の事故で目が見えない。ここが重要なポイントになる。現在の新山口駅は当時は小郡駅。やまぐち号が山口県から島根県に入る県境のトンネルに入る直前、「あっ、危ない」との声が上がり、トンネル入口の上から写真を撮ろうとしている人物がよろけて、落下してくるのが見えた。列車は停止し、調べてみるとはねられて死亡しているのが発見された。警察が捜査を開始していく。落下直前に傍に他の人物がいたらしいことがわかってくる。被害者は鉄道写真にそれほど興味を持っていたわけでもなく、不自然さが感じられ、殺人事件との見方が強まった。背景から人物が調べられ、アリバイ崩しに話は進んでいく。登場人物の思いも含めて、ストーリーは最後の結末に向かっていく。